ハイエルフはオラリオにて生を愉しむ

H—13

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バグぶち込みたかったらレベル下げろって天啓が降りてきた。レベルは1です。レベルは。原作沿いです。

目次

お手紙は唐突に。 ―― 1
精霊の寵子 ―― 7
外伝、回想 ―― 14

お手紙は唐突に。

リヴェリア・リヨス・アールヴ

言わずと知れたロキ・ファミリアの副団長。そして間近に迫った遠征の為に書類の山に囲まれる毎日を送るハイエルフでもある。

部下の教育、酒癖の悪い主神の折檻。幹部会議…ｅｔｃ。

遠征前の数日は自分の為の時間が作れるとはいえ多忙を極めているという言葉が似合う状態である。

そんな日を終え、漸く湯浴みと就寝という安らぎが訪れようとした時。自室の扉に見掛けない封筒が挟まっていた。

不審そうにソレに触れれば、疑問の瓦礫と新たな疑問が積み重なった。

故郷の香り、そして上質なコレは王族が良く使うソレ。宛名は無いが誰が見てるか分からない廊下で開けるのは躊躇われた。

部屋に滑り込めば椅子に腰掛け丁寧に封を切った。

『久しぶり。森での生活に飽きたからちょっとそっちに行くから宜しく～。ロート』

その他にもここまで活躍が聞こえて来てるだの色々と雑多に書かれながらも読みやすく丁寧に書かれた文に頬が緩まる。それと同時に緊張が走る。

ロート・リヨス・アールヴ

リヴェリアの叔父に当たる人物でありアールヴを名乗ることが許されている王族。それもリヴェリアとは違い王位継承権を持つ正真正銘のエルフの王子である。

王子…とは言えどリヴェリアの叔父。その歳は１７０位。端数は数えていなかったりする適当具合である。

故郷を飛び出したリヴェリアの理解者にして、精霊の寵子。リヴェリアが知る限りでの最強の魔導師。それがロートであった。リヴェリアが森から飛び出した時にお咎めが無かったのも彼の取り成しだと後に知ったのだ。

Ｌｖ６となり今のオラリオで上澄みの実力者となったリヴェリアですら優劣を競った場合勝てると断言出来ないのである。

それが、来る。書き方から察するに飛んでくるのだろう。

アルヴの王森では最早当たり前となっていたロートの飛行もオラリオでは違う。そして待ち合わせもクソも無いためにリヴェリアの魔力の色を目標にして来るのだろう。

「朝一にエイナ…いや、ロイマンの所に足を運ぶか。」

混乱は必至。オラリオ中…オラリオ外からもロートを拝みにエルフが殺到するだろ

う。防げるとは思わないが事後報告になるよりはギルドもマシだろう。
３０年近くオラリオに居るリヴェリアでも未だにエルフ達からの対応は完全には柔らかくないのだ。ロートに向けられる感情は「信仰」の域に達するだろうことは容易に想像が出来るのだ。
楽しみで、少し不安で。寝付けたのは1時間後のリヴェリアであった。

「ロート…様が、来ると…？」
遅番であったロイマンを早朝に叩き起したのがリヴェリアで無ければ要件すら聞かないような寝ぼけ眼はリヴェリアからの一言で吹き飛んだ。震える手でリヴェリアから渡された手紙を見て更に震え上がる
「おひとりで…？」
「飛んでくると書いてある通りだ。私が言えた話では無いが…絶対に混乱は起きる。事後報告よりはマシだと来たのだ。」
「……いつ、到着…」
「早くて今日、遅くて明日中にはという具合だろうな」

ロイマン、撃沈す。如何に強欲で肥太ったエルフの恥ではあるがハイエルフ自体が信仰地味た存在対象である認識には変わりない。優秀だからこそ、ロートの価値をある程度正確に把握している1人でもある。

「豚が舞う」

その日、その光景を目にした神は口々にこう呟き、新しい娯楽の気配を感じたのであった。

そんなオラリオの一部の存在がドタバタ大騒ぎしている3日前に遡る。

アルヴの王森。その中心。王宮の様なソコ。王族の住処でありロートも例外なくそこを生活の中心にしていた。

「ロート様、お茶をお持ちしました。」

「ありがとう、リオ。ちょっと待ってね〜?よし、出来た。」

「何方宛ですか?」

「リヴェリア…オラリオに居る姪にね。遊びに行くんだから先に出さなきゃね?」

「……は？森から出られるのですか？」
「あははは。あー、えーとー、そうだねー。ここに居るのも飽きちゃったからね。ほら、兄が居るからそこら辺は大丈夫でしょ。」
「ですが！」
「大丈夫、父上は説得したから。１０００年ほっつき歩いてる訳でも無いしたまには帰ってくるからね？」

付き人のリオ。現在１５０歳近いエルフはロートの後輩で昔むかしからの仲である。ロートに真正面からしっかりと向き合える人物だとして長く付き人兼護衛としてここまで仕えてきた。
「先輩のそれは交渉じゃ無くて脅迫じゃないですか」
「武力も大事な交渉材料の一つだぜ」

立場を弁えながらもある程度軽く接することの出来る数少ない同族の一人であった。
「は～…。それじゃ俺もついて行きます！」
「飛んで行きたいんだけど？」
「背負っていってください！」

「ボクシンジャウ」
「昔沢山担いで飛んでくれたじゃないですか！」
「俺らがガキの頃じゃん。もうやってないじゃん。」
　長い耳をピコピコと上下に動かしながら、じゃれ合う様に良い歳の男共が巫山戯る。
そんな明るい雰囲気に釣られたか、手紙がふわりと浮かび上がる。
「よしよし。手紙には1人でって書いちゃったけどこれで良いか。よし！リヴェリアの所まで届けてくれよ！」
　窓から自然と飛び出し強風と共に空へと舞い上がる封筒に入った手紙。それは風に乗り、アルヴの森からオラリオに向かって流れ始めた。
「リオ！行く準備はしとけよ！」
「やったー!!!」
　持ってきてくれたお茶はちゃんと美味しく頂きましたとさ。

精霊の寵子

オラリオに、激震が走る。

正確に言えばエルフに対し、リヴェリアの名を使いロイマンがギルドの力を持って発信した情報によって揺れたのだ。

『ロート・リヨス・アールヴが近々オラリオに来る。』

朝一にリヴェリアが伝え、昼過ぎにはオラリオ中に情報を広めたその手腕は確かにギルド長として君臨するに相応しいモノであった。

「崇めるなとは言わない。だが、混乱を我々が求めている訳では無い。ギルド主導で叔父には時間を作らせる為に押し掛けることはしないで欲しい。」

リヴェリアの直筆によって書かれた紙が張り出されれば、エルフは納得した。然しその孕んだ熱はどう足掻いても冷めることは無いのだ。

それはフレイヤ・ファミリアの【白妖の魔杖】【黒妖の魔剣】筆頭に豊穣の女主人の【疾風】や高レベルに上り詰めたエルフですら例外では無い。

親から、生まれ育った処の長老から。童話に出てくる古代の英雄と同列かそれ以上の

存在として語り、吟遊詩人が歌い讃える。そんな存在である。
曰く、天空の覇者
曰く、王森の守護者
曰く、終焉の番人

一つですら偉業と称えられるその全てが実話。文字通りの大英雄。
その根本を支えるのは唯一無二の「精霊の寵愛」
アルヴの王森に存在する精霊の全てが祝福を与え、愛し、育んだソレは確りとロートに現れていた。

だからこそ、成人男性二人とその荷物を持った上での長距離高速飛行が実現する。
ロートがイメージし、身体に巻き付く精霊達がソレを出力する。燃料はブーストされまくったロート自身の魔力である。

「目指せ！オラリオ！」
「レッツゴー!!!」

リヴェリアが頑張っているというのに成人（三桁歳）男性の２人は呑気なものである。姪へのお土産である酒やら布やらも沢山持ちながら最低限の生活を送れるように準備を整えていた。

高度１００ｍ。物理的にロートの背中に括り付けられたリオではあったが確りとロート自身が保護の膜を張ることによって物理的な障害は皆無となる。だからこそ一世紀ぶりの久しぶりの空の旅にテンションＭＡＸなのだ。

本来ならば直線距離ですら丸々一月馬かなにかに乗って移動する距離を１日で移動する。

水分は精霊に頼めば補給出来るし、風や諸々の抵抗は無いのだから食事も移動しながら行える。

リヴェリアも、ヘディンすらも届き得ない膨大な魔力量。そもそもハイエルフとして平均値から大きく上に跳ね上がっている魔力量を更にブーストするのは精霊である。

だからこそ、日が沈む前にオラリオが見えて来てしまうほどに休み無しで移動が続けられる。

「意外に近かったですね。」

「意外とな。此の儘リヴェリアの所まで行くぞ」

何気に初の試みであった長距離長時間飛行に加えて単独以外での飛行もあってかロートの顔には薄らと疲れが見える。

オラリオを囲む城壁を軽々と飛び越え、点々と見えるエルフの魔力に微笑み、見つけた。

一直線でとはいかない。鳥が宙を旋回する様にぐるりと黄昏の館の上を飛びながら、着地する場所を把握して、漸くふわりと地面に足を付けた。

丁度黄昏の館の正門入り口。門番としてそこに立っていた2人のエルフは即座に跪いた。二つ名持ちのレベル2。壁を突き破った戦士だからこそ、目の前の御方が誰か名乗らずとも分かった。

リヴェリアがロキに掛け合い、確りと言い含めたエルフを今日明日と門番に据え置いたのはこの為である。

オラリオでは感じる事の無い濃い王森の気配。渦巻く精霊の魔力。一部のエルフから下界と評されるオラリオの空気。そこまで貶さなくともと内心思うがこれではそう評するのも分かってしまう。

「やぁ。立って立って。折角来たのに此処でもそれじゃ肩の力が抜けないよ、僕の肩な

んだけど。よし、じゃぁそっちの君はリヴェリアを呼んできて欲しい。それで君は門番続行だ。良いね？」

物理的に縛り付けていたリオを外しながら軽くジョークを垂れ流すのは信仰の対象であるロート自身。こういった手合いに関しては最早慣れたを通り越して流れる様に対応する一面はまさに王族なのだろう。

「はッ!!」

「うんうん、しっかりしてる。もう少し強ければ近衛でもやって行けそうじゃない？」

「見たところまだ青い。まだまだでしょう。」

「厳しいね～」

「近衛ではその位に厳しくなければ。」

普段の二割増程のキレの良さを見ながらうんうんと頷くロートの問いには、付き人としての言葉を返す。

その辺のさじ加減や息の合い様は伊達に一世紀以上を共に過ごしている訳では無いのだ。

「叔父上！」

バタバタバタバタ！幼子に返った様な様子で飛び出してきた見知った顔に苦笑いを返しながら確りと抱き留める気概を見せた。

「久しぶりだね。頑張っているかい？」
保護者の様な、親代わりの様な。最年長であろうリヴェリアが見せる懐いた犬の様な表情は門番の彼からは見えなかったのは幸いであろう。
長い耳をピコピコと動かしながらぎゅーっと抱き締め、久しぶりに吸い込むアルヴの王森の香りに安心する。
「はい！……ぁ、んん。！励んでおります。」
反射的に口から出た素直な肯定の言葉を丁度出てきたロキが聞いてしまい噴き出す。
リヴェリア自身も直ぐに気が付けば言い直すも最早遅い。
年長者であるロートとリオは微笑ましい様なものを見る目。ロキは爆笑し、門番であった2人は驚愕の表情を浮かべ、リヴェリア自身は耳先まで真っ赤にしながらポカポカとロートの胸元を叩いて悶えている。
「久しいな。ロキだったか？リヴェリアが世話になっている。私も短いながら世話になるかもしれんがよろしく頼もう。」
「うぷぷ…ッ！笑い死ぬとこやったわ。可愛いとこもあるやんリヴェリア。そんで？ちょっとやったか。ウチがリヴェリアを引っ張り出した時の恩返しにはピッタリやな。自分ちだと思ってゆっくりしていってな！」
紛うことなきポンコツ・ハイエルフとなったリヴェリアの頭を撫でながら、未だに腹

が捩れるとでも言いたい神に向かってそう伝えた。
下界に染まった神には数日か、数週間か。その程度に思えていたがまさかその少しが10年単位だとは思うまい。不老と長寿。そんな地上に降りてくる前の様な感覚で話されては溜まったものでは無いのだ。
「るぉぉきぃぃぃぃ?」
地獄の底から這い上がる様な声音を発するのはロキが笑い殺されそうになった元凶。ギリギリ3桁歳に届かぬロキ・ファミリアのママ。
盛大な追いかけっこがロートとリオの前で繰り広げられ、最終的には笑い過ぎたせいでしゃっくりが止まらなくなったロキが小石に躓いた事により捕獲された所で終わりを迎えた。

外伝、回想

ラーファル・リヨス・アールヴ。

長男だからという理由で王となったリヴェリアの父親にしてロートの兄である。

『面倒事を全部誰かに押し付けるけど良いのかい？』

『いつでも森を出ても良いんだけど…どうする？』

当時王であったラーファルとロートの父親に真正面から面と向かって言い放ち、序の如く膨大な魔力を噴き出させながら脅しもとい交渉を行った弟。

近衛と、王族と。当然ラーファルや父親も含めて玉座の周りに居るエルフという戦力の頂点がロートにかかりに行ったとしても一方的に蹂躙されるがオチになる事が明確。

１００年前。そう、未だロートが若造であった頃。同時にラーファルも若造であった頃。

グリーン・ドラゴン『強化種』の顕現。そして、ロート単独での討伐。

ロートやエルフ達にレベルという概念は浸透して居ない。然し当時の王であったロートやラーファルの父が討伐に乗り出し瀕死の重症を負わされたのだ。

あえて書こう。その竜の想定レベルは脅威のレベル４上位相当。

当然ながら死闘となった。ロート自身無我夢中であり当時の記憶は無く、近衛や他のエルフ達も圧倒的なその余波に耐え切れずに遠くへと避難していたから、戦いの内容は分からない。

地面はクレーターと化し、ロート自身右手と杖を中心にまっ黒焦げの重症。されど、目の前にはグリーン・ドラゴンであったであろう灰とドロップアイテムであろう巨大な宝石が転がっていたと聞く。

恩恵すらない一般人と身体性能が変わらぬただのハイエルフ。少しばかり精霊に好かれ、こうして共に戦える現代の英傑。

神がソレを見れば半狂乱し、全勢力を用いて囲いこんだだろう。当時のトップであったゼウスですら例外ではないだろう。

それだけの実力がロートには備わっていた。武力で無理やり森の中に閉じ込める事は最早無理同然でもあった。

だが、ロートは冷静に自身の力を伸ばす為に外に出るのでは無く内に籠った。

走馬灯の中自分では制御出来ない禁忌へと手を伸ばし、杖と半身をチップに何とか賭

けに勝てた。だが最上級の大聖樹の大杖は大破し、精霊が居なければ半分炭になり掛けていた片腕は切り落とさねばならなかっただろう。

森で、外の世界で、吟遊詩人は高らかにソレを唄う。

エルフの頂点としての威光を。古代の英傑の再誕を。

荒唐無稽過ぎた為にオラリオですら眉唾物とされ、一時の流行りとしてぼんやりと消えていったソレ。

然し、王森を訪れることの出来るエルフだけはその唄が事実だと知っている。

森の奥。一画のみであるが開け、木が生えない場所が存在する。

１００年経った今も当時の激戦の跡が其の儘そこに横たわる。当然王族から森を再生する為の計画が打ち立てられた。然しどう足掻いてもその跡が修復される事は無かったのだ。

父はロートにその業を使う事を禁じた。ロートも分かるのだろう。自分が振るったその力を。いや、ロートが一番分かっているのだろうな。

ロートのこの伝説とも言える戦いは戦記の様な本となり、エルフにとっては「リシェーナ」や「セルディア」と同列として王族の中でも一層信仰の対象となったのだ。

だからか。だからこそか。娘が憧れない訳が無かったのだろう。

外の世界への渇望も、空への憧れも。どれもこれもが弟が与えたものであった。
王族としての自覚、責務。そして神にも劣らぬエルフの頂点としての威光。
王としてラーファルはリヴェリアに求めた。
ロートは一人の叔父としてリヴェリアに接し、相談に乗り。時に強請られば空の旅へと誘った。
さて、そんなお転婆なリヴェリアはひとつ失念していた事があった。
ロート・リヨス・アールヴにあり、リヴェリア・リヨス・アールヴには無いものは何か。
『己を貫き通せる圧倒的な武力』
これに尽きるのだ。ロートが自由な理由は全てでは無いが8割程はコレがあるからである。
たとえ「セルディア」の気質を受け継いで居ようとも。才能があり幾つもの魔法を覚えていようとも。
ラーファルがリヴェリアに求めた事こそが常識であり、真実だとされているから。
だからこそ、森を出る為に行動をし始めたリヴェリアに王は容赦が無かった。
神を嫌い、娘を閉じ込め。目の前に居る小人族の様に衰退しない様に。
然し、願いも虚しく娘は神の忌々しい恩恵を背に刻んだ。

その柔肌を晒し、森を出る為に。自らの目的を達成する為に。
だからこそ、王の重い腰は上がった。

「神といえど許さん！アールヴの名のもとに宣言する！あのふとどふべらッ!!?!?」

互いの意見が確り出し合われ、ローファスは王としても親としてもブチ切れた。
そんな激おこエルエルインフェルノの顔面にライダーキックをぶち込みに来たロートによって場の空気は滅茶苦茶となる。
「アールヴの名を使うならオレを説得してから使うんだな。そんな安物じゃ無いだろ？」
「ろ、ロート様！」
「叔父上!?」
地面に頭がめり込みピクピクと気絶したローファスの代わりに、エルフの英雄がリヴェリアの前へと立つ。
エルフ達は例外無く跪き、立っている者はリヴェリアを除き皆無。これにはロキもフィンも驚くしかないというもの。
「リヴェリア、本当にその選択で良いのか答えなさい。今ならオレの力で何も無かった

ことにも出来る。」
「覚悟の上です。私は外の世界を見てみたい。」
「うん、うん。まぁさっきのヤツ聞いてたから知ってるけど。独り立ちする時が来たか。」
それだけでリヴェリアだけにのしかかっていた圧力が消える。叔父としてのロートでは無く、王族の一人としての顔が垣間見える。
「なんかさっきのよりは話が分かるやん？ほなら解決しふべらっ!?!」
大聖樹の大杖のフルスイング。見事ロキの頬を捉え2回転半身体を回転させながら地面へと強烈なキッスをさせた。
「リヴェリアの肌を晒させ消えぬ痕を刻んだオレなりのケジメだ。これで許しておくからな？いいな？」
「は？」
フィンが目を見開く。曲りなりにも前衛。恩恵を持ったこの場における最強だった個。
注目していたのにも関わらずにロートの動きに反応が出来なかった事実。主神が半殺しにされた現実。
だが、ロキは許された。エルフの総意として。神ロキをこの件にて責めることは出来

なくなった。

「パルゥム、リヴェリアを頼んだぞ。ソコの神もな。そして、門出はオレが祝おう！」

『グオォォォォォォォォ゛゛!!!!』

復讐に燃えるグリーンドラゴン。漸くその時だと天に有り余る咆哮を。

だが、場所が悪い。相手が悪い。刻が悪い。

姪にいい所を見せようとする最強の叔父がここに居るのだから。

濃い魔力に包まれている王森よりも濃厚で、飽和しそうな程の精霊の魔力とロートの魔力が混ざり合う。

ふわふわと浮かび上がれば足元から拡がる天蓋の様な魔法陣。詠唱は無く、溜めも僅か。だが顕現するのは人智を超える巨大な炎の剣。

「【『レーヴァテイン』】!!」

剣が堕ちる。炎によって一定範囲の空気が一瞬にして渇く。唇がヒビ割れ、血が滲む程に。

たくさんのエルフ達が居るがそんなもの達に意識を裂く暇など1寸すらグリーンド

ラゴンには残されていなかった。

『グオオオ、アアア……』

刺し貫かれ、内側からも、外側からも焼かれながら魔石を砕かれたグリーンドラゴンが抵抗することはもう無い。灰に還ったのならば、巨大な炎の剣も同じ様に魔力へ還った。

「行け！オレ達のことは心配するな！嫌になったら帰って来いよ！」

こうして、リヴェリアは外へと出た。後は皆の知る通りである。

レベル6というひと握りまで登り詰め、娘の様な子もできたと。手紙で良く名前の出る子も、書いてないが察せることやら。

「ん？シルフ…そうか。そうなら…ちょっと私もオラリオに行こうかな」

動乱の時代の始まりに置いて行かれないように。役割を果たす為に。

オラリオに行く半月前の独り言であった。